

第 14 研究の活動報告

—成果と課題—

発表者 望月詩史（研究代表者）

①研究課題・研究目的

第 14 研究の研究課題は、「日本保守主義の再検討：「守る」対象の二重構造をめぐって」である。第 20 期部門研究会第 10 研究における取り組みを踏まえた設定した課題である。研究目的は、日本の保守主義が守ろうとしてきたものを明らかにすることである。本研究の動機は、「バーク的保守主義」（「自由」を守る）を保守主義の基準として設定する先行研究に対する疑問にある。この基準により、従来の保守主義に対する理解（「反動」と一括りに理解）では見落とされてきた思想が可視化されたとはいえ、反対に見えにくくなった思想もある。そこで、本研究では、異なる視角から保守主義にアプローチを試みる。

②研究方法

本研究では、保守主義の二重構造を仮定している。具体的には、「〇〇を守るために（□□から）△△を守る」であり、「〇〇」が守る本質、「□□」が対抗思想、そして、「△△」が本質を守る手段である。二重構造を仮定したのは、先行研究が守る手段に注目するあまり、守る本質を見落としてきたと考えるからである。保守主義に対しては、「一貫性のなさ」や「状況主義」などが指摘されるが、これは手段に注目して本質を見落としている理解の典型である。だが、本質を守るために手段の変化を受け入れる、手段は複数存在しておりその幾つかなの変化を許容する、という保守主義の立場も十分に考えられる。

③活動概要

第一に、研究会参加者による個別報告である。報告者が取り上げた人物の一例として、折口信夫、津久井龍雄、津田左右吉、長谷川如是閑、柳田国男らが挙げられる。第二に、ゲストスピーカーによる講演である（宇野重規氏、岡佑哉氏、川田稔氏）。第三に、1994 年に西部邁が創刊した『発言者』関係者への聞き取り調査である。これは第 20 期研究会第 10 研究より継続的に実施しており、今期は東谷暁氏（『発言者』創刊当時の編集長）への聞き取りを行った。

④研究成果（の見通し）

第一に、時代や世代を限定した上で「バーク的保守主義」以外の保守主義の存在が明確に浮かび上がってきた点である。この保守主義は、1930 年代以降の戦争、敗戦、占領などの影響を受けて形成されたと考えられる。第二に、守る本質がナショナルなもの（「日本（人）の〇〇を守るために…」）に関係している可能性が高いことを明らかにした点である。第三

は『発言者』の研究成果だが、同誌の創刊の経緯、編集・刊行の内情などが明らかになった点である。『発言者』は西部の掲げる「真正保守」に共鳴する人々が集結したように見えるが、実際には西部を中心とする人間関係が重要な意味を持っていた。

⑤今後の予定と課題

第一に、成果論文集の刊行を目指している。それに向けて、取り上げる人物を確定する必要がある。現時点では、戦前から戦後にかけて活動した人物を軸に論文集を構成する予定である。また、守る本質が複数の場合、その類型化を図りたい。第二に、公開講演会の開催を目指している。『発言者』に関する研究発表とパネルディスカッションの2部構成を予定している。後者で何を論点とし、パネラーから何を引き出したいのかを確定させた上で、それに応じて、研究発表の内容を調整したい。